創立50周年記念行事

令和6年「まほろば会秋の見学旅行」資料

「今城塚古墳」と秋の奈良を巡る旅

令和6年11月8日（金）～10日（日）

まほろば会

はじめに

今年は、元旦から大震災に見舞われまた夏の豪雨でも大変な被害に遭い、幾多の尊い命そして貴重な財産が失われました。謹んでお悔やみ申し上げます。

当会は、4年ぶりの「秋の見学旅行」を、昨年11月に「1泊2日というコンパクトサイズ」で成功裏に実施（「琵琶湖周辺の旅（国宝彦根城・湖東三山）」）することが出来ました。あれから、あっという間に1年が経ちました。

今回の見学旅行は「今城塚古墳と秋の奈良を巡る旅」と銘打って、従来の「2泊3日」という日程に戻し、古代史的にもとても重要な古墳を含めて、まさに「当会創立50周年記念行事」に相応しい見学旅行といたしました。

旅行初日は、JR高槻駅に集合して「被葬者は継体大王」と推察される「今城塚古墳」を先ず見学。そして、一気に奈良市までバスを走らせ、いま話題沸騰の「富雄丸山古墳」を見学します。両古墳の解説は、今年の7月に当会幹事をご勇退された「髙川 博さん」にお願いをしております。どうぞご期待ください。初日の締めは、奈良国立博物館での「正倉院展」見学です。お楽しみください。

二日目は、桜井市の多武峰（とうのみね）に有って「中臣鎌足と中大兄皇子が乙巳（いっし）の変の計画を談（かたら）った」と言われる「談山（たんざん）神社」から始まり、斉明天皇の墓である「牽牛子塚（けんごしづか）古墳」、あまりにも有名な「高松塚古墳」「キトラ古墳」、ちょっと趣を変えて「岡寺」を巡り、とりは「石舞台古墳」です。

そして最終日、桜井市初瀬にある399段の登廊（のぼりろう）で有名な「長谷寺」で健脚を競っていただき、「三人寄れば文殊の知恵」で知られる日本三文殊の一つ「安倍文珠院」で、なんと昼食です！今回の見学旅行の最後を飾るのは、「橿原神宮」そして「橿原考古学研究所」（いわゆる「かしこうけん」）での「秋の特別展（古墳時代の甲冑の展示）」。

「創立50周年記念行事」としての今回の見学旅行を、どうぞ皆さん十分にご堪能ください。

幹事一同

令和６年（2024年）　まほろば会「秋の見学旅行（今城塚古墳と秋の奈良を巡る旅）」行程

＜日程＞　２０２４年 １１月８日（金）～１０日（日）　２泊３日
＜集合＞　１１月８日（金）　１１時３０分　ＪＲ東海道本線「高槻駅」中央口改札 外

１１月８日（金）

今城塚古墳公園・今城塚古代歴史館　⇒　富雄丸山古墳（車窓）　⇒　奈良国立博物館（常設展・正倉院展）　⇒　ホテル

１１月９日（土）

＊７時５０分：ホテル１階ロビー集合　⇒　８時：JR奈良駅前で貸切バスに乗車（徒歩５分）
談山神社　⇒　牽牛子塚古墳（石室内見学）　⇒　昼食「柿の葉寿司ヤマト」　⇒　高松塚古墳・同壁画館　⇒　岡寺　⇒　キトラ古墳・同古墳壁画特別公開　⇒　石舞台古墳（車窓の場合有り）　⇒　ホテル

１１月１０日（日）

＊７時５０分：ホテル１階ロビー集合　⇒　９日（土）と同じ
奈良長谷寺　⇒　安倍文殊院・「同院で昼食（抹茶・懐石料理）」　⇒　橿原神宮　⇒　橿原考古学研究所附属博物館（常設展・秋の特別展「甲冑・古墳時代の武威と技術」）
＜解散＞　１１月１０日（日）１５時４０分頃　近鉄大和八木駅前

＊宿泊ホテル：奈良ワシントンホテルプラザ　＜２連泊＞　　０７４２－２７－０４１０
　エコ連泊：タオル類の交換とゴミの回収のみとなります。シーツ、枕カバー、ナイトウエアー、歯ブラシ、かみそりの交換は行いません。
＊朝食：同ホテル１階レストラン「銀座」にて６時３０分から営業。各自で自由におとりください。両日とも和定食になります。
＊夕食：８日（金）同ホテル１階レストラン。開始時刻は当日ご案内します。
　　９日（土）「奈良めし板焚屋」（飲み物付）。集合・開始時刻は当日ご案内します。

＊新型コロナウイルス対策
①バスご乗車の際にはできるだけマスクを着用してください。
②その他は利用する施設の方針にご協力ください。

＜緊急連絡先＞
籏野　０８０－５１７０－０２８１　　天野　０９０－６２１３－４４８７　　恒成　０９０－９９５８－０９６３

＜旅行参加者＞
赤松史朗・空井 正・小川克己・小野 彰・金子恭二・北村滋規・小林繋治・坂井裕幸・島 文夫・白石 崇・関谷一郎・
髙川 博・瀧川 実・田中春秋・田畑和隆・田畑裕之・徳弘奈美・豊島達哉・豊田亀次郎・長嶋良一・堀田信良・安田 力
（以下幹事）天野静一郎・上原一信・尾利出 収・斎多毅志・千葉友希代・恒成憲一・西村 徹・籏野浩志
（敬称略・五十音順　30名）

今城塚古墳・見学のポイント

前方部を西に向ける前方後円墳
墳丘長は181m　後円部径91m
6世紀前半の築造

埴輪祭祀場は前方部北側内堤張出部にある

被葬者は**継体大王**と推察される

古代歴史館

・伏見地震による**墳丘崩壊地層（断層）**
伏見地震（1596年）は墳丘の大規模崩壊をもたらした
平成12年（2000年）の発掘調査により前方部から周濠にかけて50mにわたり盛り土の大きなうねりが観測された。後円部は上半分を失い、石室は跡形も無くなった。前方部は安威（あい）断層直下にあたっている、と考えられている。

・**3種類の石棺**（破片とレプリカ）
①阿蘇凝灰岩（馬門石、ピンク石）　宇土半島産で畿内・吉備に14例ほど見られる。
②竜山石（兵庫・加古川流域）
③二上山・白石（奈良・大阪境の二上山産）

埴輪祭祀場

・前方部の内堤張出部から地下に埋まってた**約200点の埴輪**が発掘された。地震による大被害の割には原状を留めており、復元が比較的容易であった。
・埴輪の種類は門と塀、家、武器を象った器財、動物、人物など**多様な形象埴輪群**である。
・これらの埴輪群は亡き**大王の殯宮で執り行われた諸儀礼**を表わしたと考えられ、古代の祭祀復元に大きな意味合いを持つ存在となった。

盗掘された副葬品（富雄丸山古墳・墳頂の主体埋葬部）

京都国立博物館　所蔵

※明治時代の末頃、大規模な盗掘があり、それを実際に見た人の証言によれば、地表約2．4mに礫層があり、この真ん中の粘土の中に刀、鏡、石製品などがきれいに並んでいた、という。

※後に骨董品として出まわり、1957年に国の重要文化財に指定され、1968年に京都国立博物館が収集家から購入した。

※ほかに銅鏡3面が知られており、いずれも三角縁神獣鏡で天理大学附属天理参考館が所蔵している。

※前期古墳に特徴的な碧玉で作った鍬形石（青線マーク）などの石製品が多いが、ほかに類例のない銅製の腕輪や銅板も出ている。（赤線でマークのもの）
鍬形石は南海産のゴホウラ貝を模したものである。

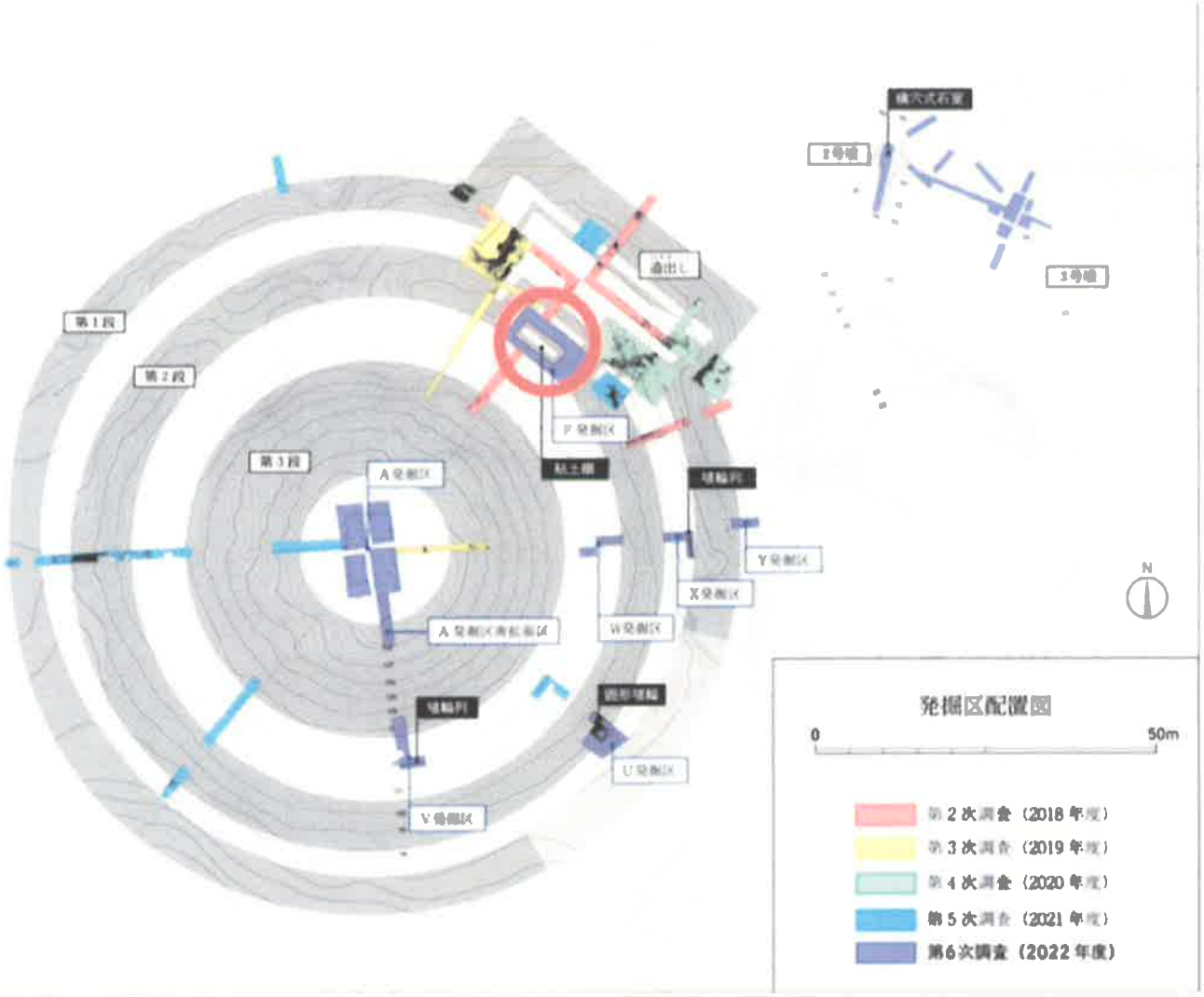


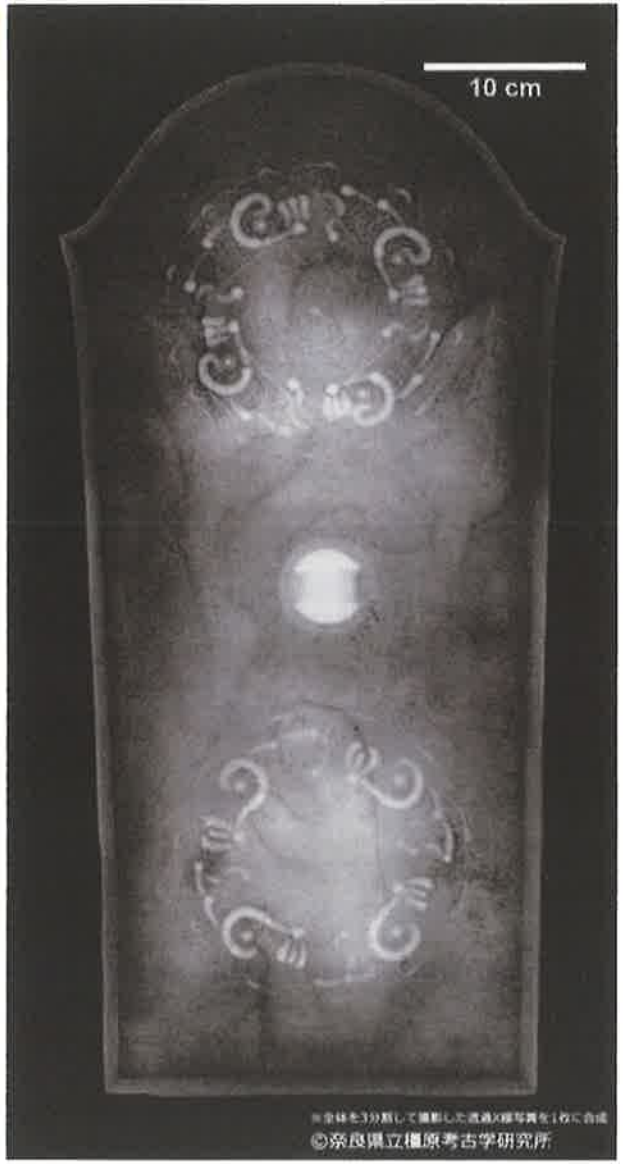
図1　富雄丸山古墳発掘区位置図

鼉（だ）龍文盾形銅鏡

富雄丸山古墳（4世紀後半）

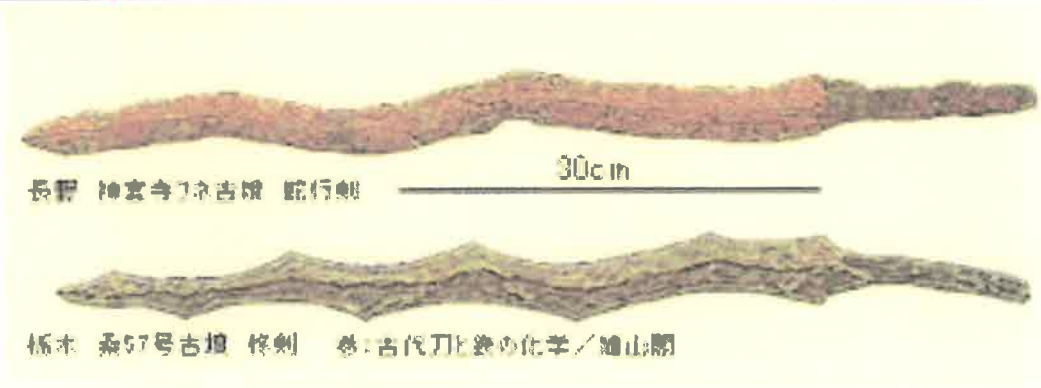
・銅鏡は通常円形であり盾形のものは初出である。また大きさも最大（長さ64cm、最大幅31cm）である。
・文様面の上下に神獣を表わす「**鼉龍**」の文様を施した鏡2枚を配置。

鼉龍文とは中国の想像上の動物で、ワニをモチーフとしたもの。古代日本において、ワニはサメやフカのことを指した。



蛇行剣

富雄丸山古墳出土
長さ237cmあり、鉄剣では国内最大で最古。
全国では85例の出土が確認。
南九州（特に日向）出土が多い。



奈良国立博物館

奈良国立博物館は奈良公園の一角にあって、東大寺、興福寺、春日大社などに隣接しています。ゆったりとした環境のなかで仏教美術の魅力とその背景にある豊かな歴史、文化のすばらしさにふれていただけると思います。

◆建物について

「なら仏像館（本館）」は、明治 27 年（1894 年）に完成した奈良で最初の本格的西洋建築。設計は、当時宮内省内匠寮技師であった「片山東熊（かたやまとうくま･1854-1917）」によるもので、フレンチルネサンス高揚期の様式をとっています。玄関まわりの装飾は意匠的にすぐれ、明治中期の西洋建築として代表的なものです。昭和 44 年（1969 年）に「旧帝国奈良博物館本館」として重要文化財に指定されました。

「なら仏像館」では、飛鳥時代から鎌倉時代にいたるまでのすぐれた仏像を数多く展示しています。また中国・朝鮮半島の仏像も展示しています。国内の博物館では、もっとも充実した仏像の展示となっています。

当会の見学旅行期間中に「第７６回正倉院展」開催中です！

奈良時代の「聖武天皇」ゆかりの宝物を展示する「正倉院展」が、奈良国立博物館で開催されています。今年で７６回目を迎えた正倉院展は約９０００ある聖武天皇ゆかりの宝物の中から「５７件」が展示されています。「黄金瑠璃鈿背十二稜鏡」は、背面に１２枚の花びらをかたどった装飾が施された鏡で、銀板に黄色や緑など３色の七宝釉薬が焼き付けられています。このほか、葡萄唐草と鳳凰の文様が織られた「肘おき」や、仮面劇の伎楽で使われた「仮面」なども展示されています。思う存分ご堪能ください。

黄金瑠璃鈿背十二稜鏡

大和多武峰　談山神社（たんざんじんじゃ：桜井市）

談山神社は奈良県桜井市の多武峰（とうのみね・・・多武峯とも書く）にある。天智天皇の信頼が厚かった藤原鎌足を大化の改新の談合の地多武峰で祀る神社。中臣（なかとみ）鎌足はのちに天智天皇となる中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）の最側近で飛鳥時代の645年（皇極天皇４年)、中大兄皇子とともに蘇我入鹿を討ち、中央統一国家及び文治政治の完成という歴史的偉業を成し遂げました。大化の改新です。飛鳥・法興寺で行われた蹴鞠会において出会った二人は、政変を起こす直前、多武峰の山中で今後の計画を談合したとのこと。因って同所は談山（かたらいやま）などの伝承が残り、これが当地で鎌足公を祀る談山神社の社号の謂れになっているとのこと。

※藤原鎌足※　６６９年（天智天皇８年)、鎌足の病が思いと知った天皇は自ら病床を見舞い、大織冠（たいしょつかん）内大臣という最上位の官位を中臣鎌足に藤原姓とともに授けられました。大織冠は当時、官位の最上位で史上藤原鎌足だけが授かった。藤原氏の祖とされています。

※阿武山（あぶやま）古墳※　１９３４年（昭和９年）に発見、６０才位の男性遺体を発見。遺体の状況と出土品から最高位に値する人物であると言われ、被葬者は藤原鎌足が有力であるとされています。出土品（一部復元）は今城塚古代歴史資料館に展示。

談山神社社伝によれば、その起源は飛鳥時代の６７８年（天武天皇７年)、唐から帰国した鎌足の長男・定慧（じょうえ）が亡父鎌足を摂津国阿威山（現在の高槻市あたり）から多武峰に改葬したことに始まると言われています。このとき定慧は供養塔として十三重塔（じゅうさんじゅうとう）を建て、２年後に講堂を築いて妙楽寺と号しました。７０１年（大宝元年）には現在の本殿である祠堂の聖霊院（しょうりょういん）を造営、そこで鎌足の木像を祀るようになったが、これをもって談山神社の始まりです。

※妙楽寺※１８６９年（明治２年）神仏分離令により廃仏毀釈が行われ廃され、６月に談山神社と改称している。神社とはなったが、仏堂の破壊行為は行われず、十三重塔をはじめとする妙楽寺の仏堂をそのまま使用することとした。そのため現在もかつての神仏習合の雰囲気を良く残しています。

＊国指定文化財＊

・摩尼輪塔（まにりんとう）　・神廟拝所（しんびょうはいしょ）　・楼門（ろうもん）　・　拝殿　・本殿　・東宝庫（ひがしほうこ）
・西宝庫　・十三重塔　・権殿（ごんでん）　・比叡神社（ひえじんじゃ）　・閼伽井社（あかいしゃ）　・総社拝殿と本殿　・石灯篭

十三重塔

神廟拝所と十三重塔

十三重塔　＜国の重要文化財＞

定慧が建立した十三重塔は６７８年（天武天皇７年）創建。唐の清涼山宝池院の塔を模したものといわれる。現在のものは、戦火で焼失して１６世紀に再建されたものですが、現存する世界唯一の木造十三重塔であり談山神社のシンボルとなっている。高さ１６．１７メートル。
この十三重塔をはじめ、境内には多くの国の重要文化財が並ぶ。日光東照宮が造営の際に参考にした（といわれる）本殿や中央の天井に伽羅の香木を用いた拝殿などそれぞれ格段の由緒を持っている。

参考：談山神社 HP　日本の寺社（デアゴ ゴスティーニ刊）　ウィキペディア
あおによし奈良・奈良県公式サイト　（担当　籏野）

牽牛子塚（けんごしづか）古墳

斉明天皇

奈良県高市郡明日香村大字越にある古墳。形状は八角墳。国の史跡に指定され、出土品は国の重要文化財に指定されています。

指定時には「あさがおつかこふん」の読みが付されており、「牽牛子」はアサガオの別称です。「御前塚」と呼称されることもあり、2009 年（平成 21 年）から 2010 年（平成 22 年）にかけての発掘調査によって、八角墳（八角形墳）であることが判明し、飛鳥時代の女帝で天智天皇・天武天皇の母とされる第 37 代斉明天皇（第 35 代皇極天皇）の陵である可能性が高まっています。2022 年 2 月に完全復旧が終了しました。

被葬者については、斉明天皇の夫舒明天皇の陵墓（段ノ塚古墳）、子の天智天皇の陵墓（御廟野古墳）および天武天皇の陵墓（野口王墓、持統天皇との合葬墳）がいずれも八角墳であり、今回の精査によって、本古墳もまた当時の皇族の陵墓に特徴的な八角墳であることが確認されました。また、本古墳が築造当初より合葬が明確に計画されていたことは調査成果によっていっそう明らかになりました。さらに、加工石をこれほどふんだんに用いた古墳は他に類例がなく、古墳自体が巨大な石造記念物であることも明らかとなりました。

以前より知られていた夾紵棺や臼歯の存在、また『日本書紀』における斉明天皇・間人皇女合葬の記述とあわせて、本古墳が斉明天皇陵である可能性はさらに高まったのです。

いっぽう宮内庁は、本古墳から西南西の方向へ 2.5 キロメートル離れた、奈良県高市郡高取町大字車木に所在する車木ケンノウ古墳を斉明天皇陵として治定してきたため、おおかたの研究者との見解とのあいだに齟齬が生じています。そのため、真の継体天皇陵として有力視される今城塚古墳（大阪府高槻市）や真の文武天皇陵として有力視される八角墳中尾山古墳（奈良県明日香村平田字中尾山）などと同様、従来の陵墓の治定を見直す必要があるのではないかという議論が起こっています。しかし、宮内庁書陵部では斉明天皇陵「越智崗上陵（おちのおかのえのみささぎ）」の候補地として牽牛子塚古墳が有力であるとする説があることを認めながらも、墓誌など確実なものが発見されない限りは陵墓治定を見直す必要はないとしています。

斉明（さいめい）天皇

皇極（こうぎょく）天皇、重祚して斉明天皇は、日本の第 35 代天皇（在位:642 年 2 月 19 日- 645 年 7 月 12 日）および第 37 代天皇（在位:655 年 2 月 14 日- 661 年 8 月 24 日）。

舒明天皇の皇后で、天智天皇・間人皇女（孝徳天皇の皇后）・天武天皇の母です。推古天皇から 1 代おいて即位した女帝（女性天皇）。

舒明天皇の後、継嗣となる皇子が定まらなかったので、推古天皇の時と同様、中継ぎの女帝として皇極天皇元年（642 年）1 月 15 日、皇極天皇として即位。49 歳。『日本書紀』によれば、天皇は古の道に従って政を行い、在位中は、蘇我蝦夷が大臣として重んじられ、その子・入鹿が自ら国政を執っていました。

皇極天皇元年 7 月 22 日（8 月 22 日）に百済の使節、平智積（へいちしゃく）らを饗応し、相撲をとらせた。これが記紀上初の相撲節会の記述となります。8 月 1 日（8 月 31 日）、天皇が南淵の河上にて跪き四方を拝み、天に祈ると雷が鳴って大雨が降る。雨は五日間続いたと伝わる。このことを民衆が称えて「至徳まします大王」と呼ばれたとのこと。同年 9 月 3 日（10 月 1 日）、百済大寺の建立と船舶の建造を命じ、9 月 19 日には宮室を造ることを命じる。同年 12 月 21 日（643 年 1 月 16 日）、小墾田宮に遷幸。

皇極天皇 2 年 4 月 28 日（643 年 5 月 21 日・50 歳）には、更に飛鳥板蓋宮に遷幸。11 月 1 日（12 月 16 日）、蘇我入鹿が山背大兄王を攻め、11 月 11 日に王は自害。

皇極天皇 4 年 6 月 12 日（645 年 7 月 10 日）、中大兄皇子らが皇極天皇がいる中、宮中で蘇我入鹿を討ち、翌日、入鹿の父の蘇我蝦夷が自害する（乙巳の変・大化の改新）という大事件が起こっています。その翌日の 6 月 14 日、皇極天皇は同母弟の軽皇子（後の孝徳天皇）に大王位を譲り、日本史上初の天皇の譲位（退位）とされる。

孝徳天皇崩御を受けて、62 歳のとき再び皇位についた（史上初の「重祚」）のです。

産経新聞 大阪夕刊 2022/03/02(水)

令和4年（2022年）3月2日　水曜日　4版　総合　6

牽牛子塚古墳の復元完了

奈良・白亜の八角墳

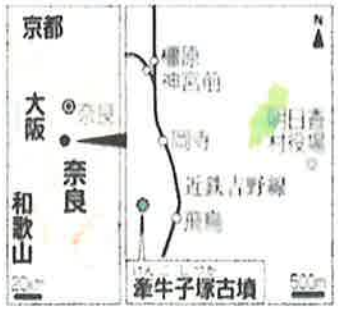
飛鳥時代の女帝・斉明天皇らの墓とされる奈良県明日香村の牽牛子塚古墳（7世紀後半）の墳丘復元工事が完了し、2日、報道陣に公開された。約2500個の凝灰岩の切石で装飾された八角墳で、白亜のピラミッド　といえる姿がお目見え　6日から一般公開される

復元が完了した墳丘は高さ約5m、対辺の長さが約22m。内部には飛鳥時代につくられた2つの墓室を持つ巨大な横口式石槨がある

古墳は平成22年の発掘調査で天皇の墓の形である八角墳と判明　飛鳥時代に土木工事で強力に国造りを進めた斉明天皇と娘の間人皇女の墓とみられるが、当時墳丘は大きく壊れており、村が29年度から約4億円をかけ復元工事を進めていた

令和6年に世界遺産登録をめざす　飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群　の構成遺産の一つで、村では国宝・高松塚古墳壁画などとともに世界遺産に向けたアピールの目玉にしたい考えだ

墳丘復元工事が完了した牽牛子塚古墳　白い八角墳が公開された　2日午前、奈良県明日香村　前川純一郎撮影



墓室からは夾紵棺の破片や金銅製の棺金具（七宝亀甲形座金具、八花文座金具、六花文環座金具、円形座金具、綾隅金具）、鉄製の鎹、釘、ガラス玉などの玉類、歯牙などの遺物が出土している。

被葬者については墳丘の形態や石槨の構造および出遺物から、斉明天皇および間人皇女の合葬された、小市岡上陵の可能性が高いと思われる。

牽牛子塚古墳は経年による劣化と近年の自然災害による影響で崩落の危険性が高まったことから丘陵全体の安定化をはかり、墳丘を保護するための整備事業が完了し、築造当時の飛鳥時代の姿が甦った。

因みに**牽牛子**とはアサガオのことである。

高松塚古墳（国営飛鳥歴史公園HPより）

国営飛鳥歴史公園内高松塚周辺地区の東に位置する古墳です。石室の壁画が有名で、特に色彩鮮やかな西壁の女子群像は、歴史の教科書などにも紹介されているのでご存知の方も多いでしょう。
7世紀末から8世紀初頭にかけて築造された終末期古墳で、直径23m（下段）及び18m（上段）、高さ5mの二段式の円墳です。
当初は、盗掘を逃れ残っていた銅鏡などから7世紀末から8世紀初めの終末期のものと推定されていましたが、2005年の発掘調査によって、藤原京期（694年～710年）の間と確定されました。
被葬者は特定されておらず、３つの主な説があります。
【３つの主な説】天武天皇の皇子説　　臣下説　　朝鮮半島系王族説

西壁　女子群像

発見の経緯
1962（昭和37）年頃、明日香村檜前の村人がショウガを貯蔵しようと直径約60cmの穴を、現在の墳丘南側に掘ったところ、穴の奥で擬灰岩の四角い切石が見つかったことが発端となりました。
その後、1970（昭和45）年に古墳近くに遊歩道設置のための調査が必要となり、奈良県立橿原考古学研究所に発掘調査を依頼しました。
1972（昭和47）年3月に末永雅雄所長指揮の下、関西大学の網干善教助教授を中心とした関西大学と龍谷大学の研究者・学生グループによって高松塚古墳の発掘調査が始まりました。発掘開始から間もない3月21日には極彩色の壁画が発見されました。
古墳自体は鎌倉時代頃に盗掘を受けており、石室の南壁には盗掘孔が開けられていましたが、壁画の彩色は鮮やかに残り、盗掘をまぬがれた副葬品の一部もこの時検出されました。
極彩色壁画の出現は考古学史上まれにみる大発見として、26日に新聞に発表され、日本中でトップニュースとなりました。
発掘作業は、国家プロジェクトとなり、壁画発見からほどなく4月5日には文化庁に引き継がれました。その後1973（昭和48）年高松塚古墳は特別史跡に、また極彩色壁画は1974（昭和49）年に国宝に指定されました。

石室・壁画について
石室は凝灰岩の切石を組み立てたもので、南側に墓道があり、南北方向に長い平面があります。
石室の寸法は南北の長さが約265cm、東西の幅が約103cm、高さが約113cmと狭く、平らな底石の上に板石を組み合わせた造りです。壁画は石室の東壁・西壁・北壁（奥壁）・天井の4面に存在し、切石の上に厚さ数ミリの漆喰を塗った上に描かれています。
東壁には手前から男子群像、四神のうちの青龍とその上の太陽、女子群像が描かれ、西壁にはこれと対称的に、手前から男子群像、四神のうちの白虎とその上の月、女子群像が描かれています。
男子・女子の群像はいずれも4人一組で、計16人の人物が描かれていますが、中でも西壁の女子群像は色彩鮮やかで、歴史の教科書をはじめさまざまな場所でカラー写真で紹介され、「飛鳥美人」のニックネームで知られています。奥の北壁には四神のうちの玄武が描かれ、天井には星辰が描かれています。天井画は、円形の金箔で星を表し、星と星の間を朱の線でつないで星座を表したものです。
石室に安置されていた棺は、わずかに残存していた残片から、漆塗り木棺であったことがわかっています。
石室は鎌倉時代頃に盗掘にあっていましたが、副葬品や棺の一部が残っていました。
出土品は漆塗り木棺の残片のほか、棺に使われていた金具類、銅釘、副葬品の大刀金具、海獣葡萄鏡、玉類（ガラス製、琥珀製）などでした。中でも隋唐鏡の様式をもつ海獣葡萄鏡と、棺の装飾に使われていた金銅製透飾金具がよく知られています。

岡　寺

歴史

1300年前、天智天皇の勅願によって
義淵僧正が建立

龍蓋寺

岡寺は古く正式には『龍蓋寺』という寺名でありますが、この『龍蓋寺』という名は、飛鳥の地を荒らし農民を苦しめていた悪『龍』を、義淵僧正がその法力をもって池の中に封じ込め大きな石で『蓋』をし改心をさせたことからその名が付いたと伝わっています。
『龍に蓋をする→龍蓋寺』というわけです。
その後悪龍は改心し善龍となって今でも池に眠ると伝わっています。その池は現在も『龍蓋池』として境内に存在し蓋である大きな要石を触ると雨が降るという言い伝えも残っており、昔には『龍蓋池』の前で請雨（雨乞い）の法要も行われたと伝わっております。
また悪龍の『厄難』を取り除き飛鳥を守った伝説は、現在まで脈々と続く岡寺の『やくよけ信仰』の始まりの所以の一つであるとも言われています。

義淵僧正

開祖の義淵僧正とは伝説にみちた人で、生年不明（？～728）。ただ出生には伝説が残されています。大和国高市郡に子供に恵まれない夫婦がおり、彼等は日々観音様に子が授かるよう祈りを捧げていました。そんなある日の夜突然子供の泣き声がして、夫婦が表に出てみると柴垣の上に白い布に包まれた赤子がおり、驚き中に連れて入ると馥郁たる香りがたちまちに家の中に満ちました。その後この夫婦に養育されていましたが、その噂を聞いた天智天皇は観音様の申し子だとしてこの子供を引き取られ、岡宮で草壁皇子(662～689)とともに育てられました。
この子供こそ後の義淵僧正その人である。というのが出生の伝説です。

後に義淵僧正は草壁皇子とともに育ったと言われる岡宮の地を与えられ、龍蓋寺（岡寺）を建立されました。義淵僧正はわが国法相宗の祖であり、当時『当代きっての傑僧（学識や修行に特にすぐれた優秀な僧）』であると言われ、文武3年(699)にはその優秀な学行（学識・修行）を賞して稲一万束を賜り、大宝3年(703)には日本で初めて『僧正』の位になり、以後神亀5年(728)の入滅に至るまでの25年にわたり同職に就き、日本仏教界を牽引されました。その門下には東大寺の基を開いた良弁、菩薩と仰がれた行基、その他にもおよそ奈良時代の高僧といわれる人は皆、義淵僧正の教えを受けたといわれています。

日本最初の厄除け霊場

見どころ

本尊の如意輪観音座像　塑像（土でできた仏像）としては日本最大の仏様で、日本三大仏にもあげられており、重要文化財に指定されています。銅像"の東大寺 毘盧遮那仏（**奈良**の大仏）、"木像"の長谷寺**御本尊** 十一面観世音菩薩、そして"塑像"の**岡寺御本尊** 如意輪観音菩薩で日本三大仏と言われています。

如意輪観音座像

キトラ古墳（国営飛鳥歴史公園HPより）

キトラ古墳は、高松塚古墳に続き日本で2番目に発見された大陸風の壁画古墳です。檜前の集落を越えて阿部山に向かう山の中腹にあります。二段築成の円墳で、上段が直径9.4m、テラス状の下段が直径13.8m、高さは上段・下段あわせて4mを少し超えると推測されています。
名前の由来は、中を覗くと亀と虎の壁画が見えたため「亀虎古墳」と呼ばれたという説、古墳の南側の地名「小字北浦」がなまって「キトラ」になったという説、またキトラ古墳が明日香村阿部山集落の北西方向にあるため四神のうち北をつかさどる亀（玄武）と西をつかさどる虎（白虎）から「亀虎」と呼ばれていたという説など、いろいろな説があります。
1983年11月7日に石室内の彩色壁画のひとつである玄武が発見されて、世間や学会から注目を集めました。2000（平成12）年には国指定史跡に指定され、続いて特別史跡に指定されました。石室の天井には本格的天文図が、壁には四つの方位を守る神とされる四神や十二支の美しい絵が描かれています。国営飛鳥歴史公園内キトラ古墳周辺地区の南に位置しています。

玄武図

造られた時代は？
7世紀末～8世紀初め頃に造られたと推測されています。古墳時代と呼ばれる時代の終わり頃です。この頃の古墳は終末期古墳と呼ばれ、古墳時代前期の巨大な前方後円墳から円墳や方墳へと形が変わり、古墳そのものも小さくなりました。

誰の古墳か？
天武天皇の皇子である高市皇子、高官であった百済王昌成、古墳周辺一帯が「阿部山」という地名であることから右大臣の阿部御主人など、いろいろな人物が想像されています。
また、金や銀を使った副葬品や豪華な装飾をほどこしたと推測できる木棺などから、かなり身分の高い人のお墓であったことがわかります。

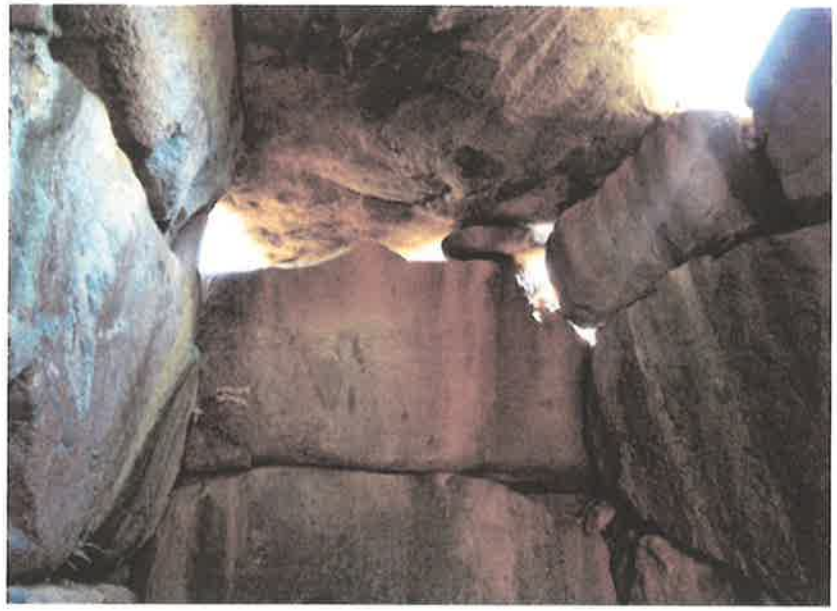
古墳内の壁画について
キトラ古墳壁画は、石室内部に塗った漆喰の上に繊細な筆づかいで描かれたものです。本格的な天文図や、四神像の全て、動物の頭と人間の体をもった十二支像などが確認されている、学術上、価値の高い文化財です。
■天文図：天井に描かれた天文図は、現存する世界最古の科学的な天文図です。天の赤道や太陽の通り道である黄道が描かれ、大きな呪術的力を持つとされた北斗七星をはじめとする中国式の星座が配置されています。太陽と月も描かれています。

今回、特別展示で実物を見学！

■四神像
・**青龍図**：天井石の隙間から流れ込んだ泥土によって多くの部分が隠れていますが、2本の角や大きく開いた口、長く描かれた舌と下アゴなどが確認できます。
・**白虎図**：通常の白虎（高松塚古墳など）とは逆に頭が北を向いています。細身で首が長く、両眼を見開き、前脚を突き出した躍動的な姿です。耳の毛や黒目も細かく描写されています。
・**朱雀図**：高松塚古墳では失われていた朱雀像がキトラ古墳には残っています。地を蹴って羽を広げ、今にも飛び立とうとしているような躍動的な姿はたいへん珍しいものです。
・**玄武図**：玄武像とは亀に蛇が絡まった像のこと。蛇の体には斑点模様が描かれ、亀の甲羅の縁には円模様が描かれています。

■獣頭人身十二支像
キトラ古墳壁画の特徴の一つは、動物の頭と人間の体で十二支をあらわした獣頭人身像が描かれていることです。
古代中国では十二支の人形（俑）をおく習慣がありましたが、キトラ古墳の場合はこの人形を壁画として描き、葬られた人の魂を守ったと考えられます。

石舞台古墳



国営飛鳥歴史公園内石舞台周辺地区の中央に位置するわが国最大級の「方墳」です。墳丘の盛土が全く残っておらず、巨大な両袖式の横穴式石室が露呈しているという独特の形状です。天井石の上面が広く平らで、まるで舞台のように見えるその形状から古くから「石舞台」と呼ばれています。30 数個の岩の総重量は約 2300 トン、特に天井石は約 77 トンとかなりの重量で、造られた当時の優れた土木・運搬技術の高さがうかがわれます。　被葬者は明らかではありませんが、7 世紀初頭の権力者で、大化の改新で滅ぼされた蘇我入鹿の祖父でもある蘇我馬子の墓ではないかといわれています。

1933（昭和 8）年～1935（昭和 10）年の発掘調査で方形の墳丘、堀、外堀が存在すること、6 世紀代の小古墳を壊して築造されていたことなどが確認されており、その上で築造は 7 世紀初め頃と推定されています。

石舞台古墳は古くから、墳丘上部の封土を失い、石室の天井石を露出させていたようで、各種の文献にそうした意味の記述を見ることができます。1772（明和 9）年、本居宣長の「管笠日記」にもその記述があります。それに拠ると、石舞台古墳は、石舞台古墳の南に位置する都塚古墳と対として意識され、それぞれ推古・用明という各天皇の伝承を持っていたようです。

1829（文政 12)年の津川長道の「卯花日記」では、蘇我馬子の墓ではないかという考察が加わっています。1848（嘉永元）年の暁鐘成の「西国三十三所名所図会」の中ではイラストとともに、高さおよそ 2 間（約 3.6m)、周囲およそ 10 間（約 18m)で、天武天皇を仮に葬り奉った場所と伝えられている、という意味のことが記されています。

＜以下は「明日香村」のホームページ＞

石舞台古墳は、細川谷に入っていく渓口部に築造された一辺約 50 メートルの大方墳で、飛鳥所在古墳の代名詞になる著名な古墳である。この古墳は、古くから石室天井部の石が露出していて、『西国三十三所名勝図会』などに旧態が描き出されており、『和州旧跡考』には「その近き所に石太屋とて陵あり」との記事がみられる。明治末年、喜田貞吉博士によって蘇我馬子桃原墓と推定されたりしていた(喜田貞吉「蘇我馬子桃原墓の推定、稀有の大石槨島の庄の石舞台の研究」歴史地理 19-4、明治 45 年)が、日本学術振興会から費用の援助を得て、昭和 8 年 1 月 5 日より、奈良県史蹟調査会と京都帝国大学考古学教室の共同で、浜田耕作博士が総括責任者、末永雅雄博士を現地主任にして石室を中心に発掘調査が始められた。続いて昭和 10 年 4 月より、墳丘基底部の周濠と外堤の調査が行われ、昭和 10 年 12 月 24 日文部大臣より史蹟としての指定を受け、更に昭和 27 年 3 月 29 日、特別史跡の指定を受けている。それにともない昭和 29 年より 33 年にかけて濠及び外堤の復原工事が行われ、東北隅の濠の上を通っていた県道も濠外にそって迂回されることとなった。

―― はて、77 トンもの重さの石をどこからどのようにして運んだのであろうか？ ――

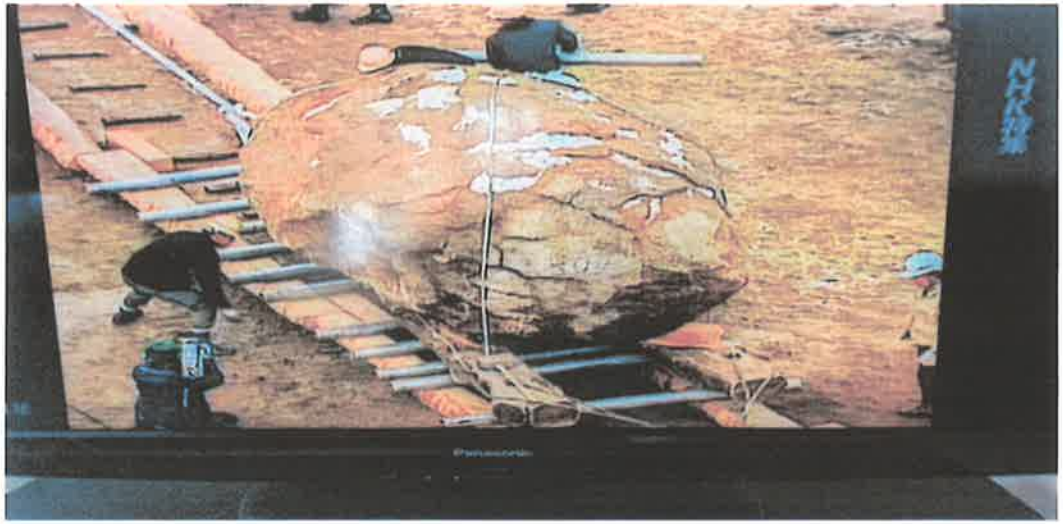
三ツ塚古墳出土の「修羅」

同復元「修羅」

実験指理
飛鳥石舞台

委員長
網干善教

前橿原考古学
研究所所長
末永雅雄
86歳



1984年（昭和59年）放映の、NHK「実験推理 飛鳥石舞台」の画像です（昨年の再放送を天野家でスマホ撮影をしたもの）。

「石舞台古墳」は、39個の巨石で出来ている古墳です。特に「天井石」は、何と77トンと63トンという重さです。はたして、こんな巨石をどこから、どのようにして運んだのでしょうか？そんな実験を試みたのが、上記の「実験〇〇」です。

1933年（昭和8年）、京都大学の「末永雅雄教授（のちの橿原考古学研究所の所長）」が中心となって、初めて石舞台古墳の本格的な発掘調査がなされました。その後、同じく京都大学の「高橋逸夫教授が書いた論文（巨石の運搬方法について）」が話題を呼びました。「500人を超す人間が人力で運んだ？」　はたしてそうだったのだろうか？？？

1983年（昭和58年）、網干善教委員長（高松塚古墳の発掘責任者）のもと「石舞台古墳発掘50周年事業委員会」が発足して、4か月半かけて各方面の専門家を集め壮大な「実験」がなされたのです。その結果、以下のことが分かったのです。

1．使用された巨石は、細川谷で切り出された「花崗閃緑（かこうせんりょく）岩」であること。

2．運搬手段として、「修羅（しゅら：そり）」・「ころ」・「轆轤（ろくろ）」（興福寺の東金堂の天井裏に現物有り）・「滑車（かっしゃ）」等が使われて労働力としての人員数も、かなり省力化できたのではないか。

（文責：天野）

長谷寺

399 段の登廊

＜以下「ウィキペディア」より抜粋＞

長谷寺（はせでら）は、奈良県桜井市初瀬（はせ）にある真言宗豊山派の総本山の寺院。山号は豊山（ぶさん）。院号は神楽院（かぐらいん）。本尊は十一面観音（十一面観世音菩薩）。開山は道明とされる。西国三十三所第 8 番札所。寺紋は輪違い紋。

ご詠歌：いくたびも参る心ははつせ寺　山もちかいも深き谷川

大和国と伊勢国を結ぶ初瀬街道を見下ろす初瀬山の中腹に本堂が建つ。初瀬山は牡丹の名所であり、4 月下旬から 5 月上旬は 150 種類以上、7,000 株といわれる牡丹が満開になり、当寺は古くから「花の御寺」と称されている。また『枕草子』『源氏物語』『更級日記』など多くの古典文学にも登場する。中でも『源氏物語』にある玉鬘の巻のエピソード中に登場する「二本（ふたもと）の杉」は現在も境内に残っている。

創建は奈良時代、8 世紀前半と推定されるが、創建の詳しい時期や事情は不明である。寺伝によれば、天武天皇の朱鳥元年（686 年）、僧の道明が初瀬山の西の丘（現在、本長谷寺が建てられている場所）に三重塔を建立、続いて神亀 4 年（727 年）、僧の徳道が聖武天皇の勅命により東の丘（現在の本堂の地）に本尊十一面観音像を祀ったというが、これらのことについては正史に見えず、伝承の域を出ない。承和 14 年（847 年）12 月 21 日に定額寺に列せられ、天安 2 年（858 年）5 月 10 日に三綱が置かれたことが記され、長谷寺もこの時期に官寺と認定されて別当が設置されたとみられている。

長谷寺は平安時代中期以降、観音霊場として貴族の信仰を集めた。万寿元年（1024 年）には藤原道長が参詣しており、中世以降は武士や庶民にも信仰を広めた。

創建当時の長谷寺は東大寺（華厳宗）の末寺 であったが、平安時代中期には興福寺（法相宗）の末寺となり、16 世紀以降は覚鑁（興教大師）によって興され頼瑜僧正により成道した新義真言宗の流れをくむ寺院となっている。

天正 16 年（1588 年）、豊臣秀吉により根来山（根来寺）を追われた新義真言宗門徒が入山し、同派の僧正専誉により真言宗豊山派が成立していった。この後、本堂は焼失したが、徳川家光の寄進によって慶安 3 年（1650 年）再建された。寛文 7 年（1667 年）には徳川家綱の寄進で本坊が建立されたが、1911 年（明治 44 年）に表門を残して全て焼失した。しかし、1924 年（大正 13 年）に再建されている。

近年は、子弟教育・僧侶（教師）の育成に力を入れており、学問寺としての性格を強めている。

十一面観音を本尊とし「長谷寺」を名乗る寺院は鎌倉の長谷寺をはじめ日本各地に多くあり、240 か寺ほど存在する。他と区別するため「大和国長谷寺」「総本山長谷寺」等と呼称することもある。

門前町初瀬の参道脇には、西国三十三所の観音霊場をつくるよう閻魔大王から託宣されたと伝わる僧侶の徳道が天平 7 年（735 年）創立したといわれる番外札所法起院（徳道上人廟）があり、初瀬川（奈良県）を渡るとかつて長谷寺の鎮守社であった與喜天満神社がある。

安倍文殊院（桜井市阿部）

安倍文殊院は「三人寄れば文殊の知恵」で知られる日本三文殊＊の一つ、「大和安倍の文殊さん」として親しまれている華厳宗の別格本山です。（＊日本三文殊：「亀岡文殊」（大聖寺だいしょうじ）山形県高畠町、「切戸（きれと）の文殊」（知恩寺）」京都府宮津市。諸説あり…「金戒光明寺」京都市など）

文殊院の前身は６４５年大化の改新の中枢として諸施策を実行し左大臣となった安倍倉梯麻呂（あべのくらはしまろ）が創建した「安倍山崇敬寺（すうきょうじ）とされています。崇敬寺は大和十五大寺の一つとして知られていました。しかし平安時代末期より多武峰（とうのみね）との抗争で被害を受け、鎌倉時代の初めに現在地に移されたものと推測されます。南西３００メートルのところに安倍寺跡として旧土地が保存されています。

１５６３年（永禄６年）、松永久秀（まつなひさひで）の兵火により堂塔が焼失するという時期もありましたが、１５７１年（元亀２年）に文殊堂が建てられ、１６６５年（寛文５年）に現本堂と礼堂（能楽舞台）が再建され現在に至っています。

陰陽師　安倍晴明公

安倍晴明公は当山の開祖である大化の改新以後の左大臣　安倍倉梯麻呂、遣唐使安倍仲麻呂、右大臣安倍御主人（あべみうし）のつながりであり、９２１年（延喜２１年）にこの地に生まれたとの言い伝えがある。（諸説あり）

幼少期に天文観測や陰陽思想＊を学んだと伝わっている。

＊陰陽師：天体観測にも基づいた占い・まじない・暦つくりを行う律令制の官僚の一つ

国宝　渡海文殊群像

＜本堂に安置＞

獅子に乗る騎獅文殊菩薩（きしもんじゅぼさつ）像を中心に、向かって左に維摩居士（ゆいまこじ）と須菩提（すぼだい）像、向かって右に獅子の手綱を持つ優填王（ゆうてんのう）像と先導役の善財童子（ぜんざいどうじ）像。

木彫極彩色の騎獅像は日本一の大きさ（像高約７ｍ）

鎌倉時代・快慶の作　　ただし維摩居士像は松永弾正焼き討ちの際に焼失、安土桃山時代　宗印によって作られました。

四人の脇士を伴う渡海文殊群像は雲海を渡り、衆生（しゅじょう）の魔を払い、知恵を授ける説法の旅に出かけている姿です。全て国宝。

＊＊文殊菩薩が獅子から降りています　圧巻！＊＊

本堂の工事のため、２０２４年７月～２０２５年５月の間、１５年ぶりに獅子から降りています。文殊菩薩と同じ目線で拝観できます。

獅子から降りた文殊菩薩

西古墳玄室

西古墳　＜国指定特別史跡＞

高松塚古墳　キトラ古墳とともに古墳としては全国で７つしかない特別史跡に指定され、その築造技術に定評があるとされています。寺の創健者といわれている安倍倉梯麻呂の墓と伝えられています。内部は築造当時（７世紀中頃と推定）のまま保存されており、花崗岩を加工し、左右対称に石組がされています。また玄室の天井岩は一枚の石で、大きさは１５平米、中央部はアーチ状に削られています。

墳形は円墳または方墳と推定。本来は３０メートル前後の墳丘規模と思われます。早くから開口していたようで棺や出土遺物は知られていません。なお、玄室には弘法大師手作りと伝わる願掛け不動が祭られています。

東古墳　＜県指定史跡＞

西古墳の東約５０メートルにある丘陵の斜面になる古墳。主体部の埋葬施設は横穴式石室で南南西方向に開口しており、石室は全長１３メートル、玄室は長さ４．７メートル、幅２．３～２，７メートル、高さ２．６メートル。玄室部はほとんど加工されていない自然石，羨道部は切石の花崗岩が使われているのが特徴で、石室の石材が自然石から切石に変化していく過渡期の古墳といえるでしょう。
築造は出土物が不明ですが石室の形状などから７世紀前半と推定。墳形は円墳または方墳と推定されます。

＊石室（せきしつ）：古墳の墳丘の中に造られた石造りの埋葬施設。
＊玄室（げんしつ）：古墳時代後期の横穴式石室・横穴墓における埋葬空間。羨道の先にある。
＊羨道（せんどう）：古墳の横穴式石室や横穴墓などの玄室と外部とを結ぶ通路部分

その他、境内の見どころとして
・釈迦堂：釈迦三尊像・守護奉納仏（約５，０００体）
・白山堂【重要文化財】
・十一面観音
・安倍晴明堂（晴明の天体観察の地）
・金閣浮御堂（仲麻呂堂）　など

参考　・　安倍文殊院公式 HP　・　奈良観光公式奈良旅ネット
・　奈良大和式巡礼の会　・　文化庁日本遺産ポータルサイト

（担当　旗野）

橿　原　神　宮

歴史

古来、畝傍山の山麓周辺には、上代の天皇陵や往昔の遺跡が数多く残っていましたが、東南麓の橿原宮址には、これまでどのような施設も造られた形跡がなく、畑地となっていました。これは、上代の都が当代一代限りのもので、次々と遷都されていたためで、新帝が新たな宮を造営されると、以前の宮は取り払われて耕地に還元されていたと考えられます。神武天皇の御陵が、橿原神宮に隣接する現在地に定められたのは幕末の文久3年（1863）。その後、修補されたこともあり、明治10年代になると橿原宮址を調査し、これを顕彰しようという動きが高まり、民間から宮址碑の建立や橿原神社の創建の出願が相次ぎました。明治22年（1889）、明治政府は神社創建を認可し、社殿として京都御所の内侍所（賢所）と神嘉殿の2棟が下賜されました。明治23年（1890）1月に移築が完了。同年3月、社号を橿原神宮とし、官幣大社に列せられることになりました。ここに橿原神宮は、神武天皇が即位された「畝傍山東南」橿原宮址に御鎮座し創建されました。平成2年（1990）には、紀元2650年を迎えると共に、橿原神宮御鎮座百年記念大祭が斎行されました。

宝物館

宝物館は平成12年（2000）に、当神宮の御鎮座百十年記念として開館しました。
創建以来奉納いただいた、明治天皇の御太刀をはじめ、明治天皇の皇后・昭憲皇太后御奉納の御鏡である「白銀八角鏡」や、横山大観作の「正気放光」などが収蔵されています。
また、平成30年（2018）、に当時の天皇皇后両陛下より下賜された銅鏡「橿原の杜」も御覧いただけます。
※展示内容は企画展により異なります。

企画展

＜令和6年7月5日～11月24日＞
橿原神宮所蔵の神武天皇を描いた絵画と立体作品（彫刻等）を一堂に集めて展観

橿原考古学研究所付属博物館

令和6年度秋季特別展「甲冑　古墳時代の武威と技術」

国家形成期にあたる古墳時代には、ヤマト王権により列島各地の政治的な統合が進められます。『宋書』倭国伝に記された倭王武の上表文は、統合に軍事が重要な役割を果たしたことを示します。こうしたなか、鉄製の武器・武具は飛躍的な発展を遂げていきます。特に、複雑な立体構造をもつ甲冑の製作には高度な技術と大量の素材が必要なため、ヤマト王権の下、一元的に生産されたと考えられてきました。同時に、甲冑は威信財的な側面をも有しています。本展覧会では、古墳時代の甲冑について、大和の出土品と各地の良好な出土例を多数展示し、その変遷を通観するとともにこれを巡る様々な問題に迫ります。

写真は
常設分

特別展
ちらし